【The Black Note】第20話　翼をもがれた天使

■オープニング

セレスモノローグ「キレイに、キレイに飾られた虚飾の歴史と、裏切りと嫉妬、憎悪にまみれた真実の歴史。永遠の謎という名の虚飾のベールが次々とはがされて、本当の……、本当の真実がとうとうあたしたちの前に姿を現した。それは後の世にブラックノートと呼ばれる闇の歴史書に記された天使たちの最初で最後の悲しみの物語」

■タイトルコール
デュレ「The Black Note 第20話　翼をもがれた天使」

■本編
□遙か遠く東方から、旅の少年。
　・森で、さわさわと風の流れる。
　　SE：さわ〜〜〜。足音、ざっざ。

申「……エルフの森……」
ジーゼ「……来てくれたのですね、申（しん）。……あなたをずっと待っていました」
申「あ……」
ジーゼ「——申……？　あなたは魂の導きに従ってここまで来てくれたのですね……」
申「ジー……ゼ……？」
ジーゼ「そうです。わたしはドライアードのジーゼです。あなたがこの森に来てくれることをずっと……長い間、待ち続けてきました。——あなたにしか出来ないことがあるのです……」
申「ぼくにしかできないこと……？」
ジーゼ「そう、退魔師のあなたにしかできないこと……」

□迷夢対マリス。何回目？

マリス「貴様——。何を企んでいる……？」
迷夢「もう……、判ってるんでしょ？　最初から今まで、そのつもりだったんだから」
マリス「……初めからか。初めから、まともに戦う気などなかったのか！」
迷夢「う〜ん、それじゃあ、半分、ウソになっちゃうからダメよ。まともに戦う気はあるに決まってる。そうじゃなくちゃ、最後まで持っていけないものねぇえ？　さぁ、マリス。あたしの前から永遠に消えな」

　　SE：剣を振るう音。

マリス「フフ」
迷夢「——その目、キミも企んでる。ね？　キミの考えてることなんてお・み・と・お・し♪」
マリス「……」
迷夢「無言……と言うことはは認めたと思っていいのね？」
マリス「勝手にしろ。——光弾！」

迷夢「！　ミラーシールド！」

　　SE：ミラーシールド。クラッシュアイズ、などなど。ぐちゃぐちゃ。

マリス「開け！　クラッシュアイズ！」
迷夢「ス……いや、サクション！　く、あっ！」

　　SE：けものの走る。

シリア「迷夢、オレと替われぇ！　向こうにお前の助けがいる」
迷夢「……。魔法陣は出来たのかしらっ？」
シリア「——魔法陣は完成した。しかし、魔力が足りない！」
マリス「……なるほど、そう言う訳か。ならば、余計に行かせる訳にはいかない」
迷夢「残念だけど、もう、キミの相手をしていられないの。リボンちゃん！」
シリア「判った」

　　SE：シリア、ジャンプ！

マリス「！　ケモノは嫌いだ。寄るな、触るな！」
シリア「出来ない相談だ。そんなにオレが嫌いなら、お前がここからいなくなればいい」
マリス「嫌いだが、そんなことができると思うか。貴様らを……消すまでは」

　　SE：じたばた。

マリス「……貴様——。貴様はここで死ねぇ」
シリア「……オレはここでは死なない。——そう言うことになってる」
マリス「スパークショット」

　　SE：スパークショット。シリア、空中にダイブ。

シリア「簡単にやられはしないさ」
マリス「スパークショット！　空中では逃れられまいっ！」
シリア「フィジカルディフェンス」

　　SE：ズドン。

マリス「——小癪な」

　　SE：剣を振る……空振り。

シリア「氷の闇、雪の雫。遙かな北方より、氷雪の魂を揺り醒まし、吹き荒ぶ北風に怒りを乗せろ。清く澄まされし氷と風のロンド。アイスブリザード！」

　　SE：氷の魔法が発動する冷たそうな音。

　　SE：ブリザード。

マリス「やはり、血筋か。あの小僧がここまでになるとは。――我が光の道しるべ、白き闇を打ち
　　砕っ」

　　SE：シリア、ブリザードから姿を出し、マリスに飛びつく。

マリス「ぐあぁ。――だから、ケモノは嫌いだ。くそっ、さぁ！　光の道しるべ、打ち砕けッ！」

　　SE：パアァァン――。

シリア「精霊王、氷雪のシリアの名に於いて命ずる。出でよ、氷の刃っ！」
マリス「……いつかどこかで、見たような光景だな……」
シリア「記憶にない。――だが、その時のオレはきっとお前に勝ったろうさ」

　　SE：剣となんかのせめぎ合い。

マリス「……しつこいな……」
シリア「ちっ……」

　　SE：シリア、マリスに飛びつこうとする。

マリス「二度も同じ手を喰らうかぁ！」

　　SE：戦う。

マリス「はぁ……、はぁ……」
シリア「その顔は……もう、許してくれないのかな？」
マリス「……はなから、許す気などないと言っただろうっ！」
シリア「……そうだった。――では、いい加減、終わりにしよう……」

　　SE：ナニカが飛んでくる音。

久須那「リボンっ！　受け取れ！　このイグニスの剣とお前の魔力を相乗したら」
シリア「久須那ッ！」

　　SE：ぶん！　剣と剣が交差する。

マリス「やはり、一筋縄ではいかないようだ……」
シリア「一筋縄でいってたまるか。……オレの魔力の全てをこのイグニスの剣に……」
マリス「何？　バカな真似はよせ」
シリア「――バカな真似じゃあないさ。勝算はオレにある……」
マリス「くそっ！　シールドアップ」

　　SE：シールドアップ。

シリア「まぁ、そう、遠慮するな。受け取っておけ。――フィールドイレーズ！」

　　SE：イグニス……暴発！

□魔法陣の制作現場。
　迷夢、空から優雅に登場？

迷夢「……？　あの頭がぴかぴか光ってるの、誰？」
デュレ「あ、あれは魔法学園のジャンルーク学園長です」
迷夢「ふ～ん……。人間にしては高次の魔力をもってるようね。……使える。――ま、それはそれ
　　として、みんな、……心から邪念を払って、精神を帰還魔法に集中させて」
ジャンルーク「……誰か、ぴかぴか光ってるとか、言わなかったかな？」
デュレ「い、いいえ。誰も何も言っていません。き、気のせいです！」
ジャンルーク「なら、いいが……」（……？　という感じ）
迷夢「さあ、いくわよ。あたしたちの根性を見せてやるの！」
セレス「……？　何が動いてるのかしら……？」

　　SE：ウエストポーチをごそごそ。
　　SE：卵が割れそう。
　　SE：セレス、どたばたとする。

セレス「迷夢。大変、生まれそうなの」
迷夢「あぁ？　何？　あとにしてよ、今、忙しいの。キミもちゃんと精神統一！　頼むわよ」
セレス「だからっ！　生まれそうなんだってっ！」
迷夢「生まれそうってなにが？　……あ……、今はダメぇ！」
セレス「ダメって言ってもそんなの無理よぉ。だって、もう、殻を突いてる」
迷夢「……！　不死鳥の卵がかえる……」

　　SE：ぴきぴき。

迷夢「……制御し切れていない……。この子が持つ魔力としては大きすぎるのね……。流石……万
　　里眼と不死鳥の卵が融合しただけのことはあるわ……」
デュレ「このままいくとどうなるんですか？」
迷夢「う～ん？　そうねぇ……。あの子、魔力に飲まれて粉微塵ね。しかも、それで済めばまだ可
　　愛いもんよ。丸ごといくんじゃないかなぁ……」
デュレ「丸ごと……」
迷夢「（急に閃いて）セレス！　その子を連れて魔法陣の中央に行ってっ！」
セレス「え？　は、はい～」

　　SE：ばたばた。

迷夢「……これで、マリスを追い返せる。――それも……あたしたちを巻き添えにしてね。――さ・て・と……、天使の世界より召喚せし天使をその本来の住処に送還を求むものなり」

SE：魔方陣発動

迷夢「……何か、めんどっちくなってきた……。リボンちゃん、あのまま、やっつけてくれないかな。親愛なる光の瞳、あたしの言うことをきけ。――ほら、ちゃっちゃと来い」
光の瞳「……呼んだか？」

SE：魔方陣、実行直前。

迷夢「呼んだわよ！　星霜の彼方より語られし、あまたの世の架け橋を閉ざしたる者に告げる。あたしは理を忘れし天使・マリスの送還を望むものなり。描かれし眼の向こうに在りしもの、……サライよ。二つの世に通ずる架け橋を開放し、翼をもちし天のお使いと称されし天使を送り返せ。架け橋の開放を望むは天使・迷夢。魔法陣に充満する魔力の全てを注ぎ込んで。――あの……可哀想なマリスを元の世界に送り返してあげて……」
光の瞳「ああ……」
迷夢「……あとはキミ次第だよ。リボンちゃん」

□再び、マリス対シリア。

マリス「何故だ……、何故、貴様に勝てない」
シリア「……背負うものが違うのさ。オレは……どうしても戻らなければならない。あいつと約束したからな。……それにあそこにいないと始まらないんだ」
マリス「何が言いたい？」
シリア「お前には判らない。……お前にとっては“今更”のことだ。知っても無意味、知ろうとするだけ時間の無駄だとオレは思う。……まだ、諦めないのだろう？」
マリス「どんな――状態になろうとも諦めん。貴様らさえいなくなれば、わたしの目的は達成される。――。天空に住まう光の意志よ。我が左腕に宿り、全てを滅する破壊のパワーを体現せよ、光弾！」

SE：光弾！　シールドアップ

シリア「！　シールドアップ」
マリス「……あぁ！　つ、翼が……」
久須那「……翼をもがれた天使……か……」

SE：マリス、足首を捕まれる。

マリス「――ま・さ・か、久須那。貴様がわたしを……」
久須那「はぁ、はぁ……。詰めが甘い……。いつも……そうだ」
マリス「そんなはずはない。わたしはいつだって、完璧だった。貴様らがわたしの邪魔をする。貴様らはわたしの考えを妨害する障害物に他ならない。障害物は排除するのみ」

久須那「……遠慮なく、排除したら良かっただろう。――お前なら、出来たはずだ……」
マリス「……」
久須那「――大人しく、天使の世界に帰れ。お前の居場所だ……」
マリス「今更、帰れるか。わたしの居場所はここしかない。貴様らを屠れば、邪魔者はない。このリテールを天使たちのものに……わたしだけのものにしてみせる」
久須那「そんなことはもう、出来ないことはお前自身がよく知っているのではないか？」
マリス「それでもわたしは戦うしかないんだッ！」
久須那「もう、戦う必要なはい……。故郷へ……」
マリス「――故郷は……なくした」
久須那「そうか……。パーミネイトトランスファー」
マリス「何？」

SE：パーミネイトトランスファー発動。そして……。

マリス「……！　これは……？」
迷夢「来た……。みんな、精神を集中して、少しでも乱したらダメよ。――キャリー……」
シルト「待って！」
迷夢「あらら？　誰よ、邪魔をするのは！　この機を逃したら、もう、次はないのよ」
シルト「でも、だって。魔法陣に揺らぎができてるから、このまま実行したら、あの天使を向こうに送る前に帰還魔法が崩壊しちゃうかも……？」
迷夢「耐久限界時間を越えたのかしら。……けど、考察してる暇もないし、再チャレンジする魔力もなければ時間もないときたもんだ。サイテーの気分ね。仕方がないから――再調整、いくわよ」
デュレ「……凄い……」
ジャンルーク「流石は黒い翼の天使……と言うべきか……」
迷夢「――いくわ、みんな。――きっと、これで終わる……。キャリーアウトっ！」

SE：魔法発動！

マリス「……魔法陣……！」
久須那「よからぬことを考えるな。大人しくしていろ」
マリス「貴様も巻き添えだぞ。貴様は異界には戻らないのだろう！」
久須那「――ターゲットはお前だけだ。お前だけを送り返せるように特別なセッティングを施した。――故郷を……なくしたと言っても、マリス、お前の帰る場所はそこしかない。――あそこなら、お前を温かく迎えてくれる――」
マリス「他人事だな。貴様はいいだろう。だが、わたしはどうなるッ！」
久須那「それでも帰れ。どう言おうと、お前の居場所はそこにしかない」
マリス「あああぁ！　わたしは天使の世界になど帰らんぞ。わたしはここの支配者になる！　わたしの邪魔はさせない！」

SE：マリス、踏ん張る。帰還魔法がうまくいかない。

シリア「迷夢！　一旦、魔法を崩して、魔力を保持しておけ」
迷夢「え～！　面倒くさいぃ。回収して、タイミングを計って、もう一度やれって言うんでしょ？

まぁ、百歩譲ってあたしはいいとしても……、みんなに負担が大きいんじゃない？」
シリア「――お前がそんなことを言うようになるとは思わなかったな」
迷夢「な、何言ってるのよ！　あ、あたしはみんなを心配してるんじゃなくて、もう一回、逆召喚魔法を実行する時の心配をしてるのよ。だって、そうでしょ？　くたびれて、集中力を切らされたら、何も出来ないわよ？　いくら、あたしが麗しの迷夢ちゃんでもっ！」
シリア「……心にもないことを……」
迷夢「～～。だから、そんなんじゃないって！」
シリア「そこまで言うなら、そう言うことにしといてやる。だが、魔法が暴走しかけてるぜ？」
迷夢「ひぇ？　スプールフィールド！」

SE：スプールシールド発動！

迷夢「いやぁ、面倒くさいぃ――キミが続きをやってくれるなら、いいわよ。リボンちゃん！」
シリア「何を言うか。お前がやれ。次はないぞ。絶対に成功させろ」
迷夢「あ～わかった。あたし、がんばるわ。でも、ちょっとだけ時間をちょうだい」
シリア「そうだな……、久須那……。手伝ってくれ。もう少しだけ、時間稼ぎが必要になった」
久須那「――判った。それでどうするつもりだ？」
シリア「やつのケモノ嫌いを利用させてもらうさ」
久須那「――バカの一つ覚えだな。もっと、大人になったものだと思っていたぞ」
シリア「ああ、そうさ。だが、オレはお前の知っているはな垂れ小僧じゃないんだぜ？」
マリス「――目覚めよ、光の瞳。その美しき光玉の彼方よりあまたの次元を駆け抜ける真実の道しるべを我が前に現せ。開け、クラッシュアイズ！」

SE：ドカンバカン。シリアくん、ジャンプ！

マリス「ええい、寄るなっ！　汚らわしい！」
シリア「何、遠慮することはないだろう。オレの毛皮はふかふかでふさふさ。島エルフの母子二代にわたって大人気なんだぜ？　お前もご相伴にあずかってみたいだろう？」
久須那「スパークショット！」

SE：スパークショット

久須那「……ちっ！」
シリア「フローズンビンディング！」
マリス「そうはいくかぁ――！」

SE：凍る音、そして、マリスがシリアを引っぺがす音。

シリア「……流石に気が付いたか……。久須那、同時にいくぞ！」
久須那「ああ」
マリス「――我が魔力よ、この右手に集中せよ」

SE：魔法の力が集まってくる。

マリス「光と炎の全てを賭けて、闇を滅する刃となせ。己の欲望、破壊の衝動に身を委ね、本能のおもむくままに大地を駆け抜け、我が右手に居場所を求めよ……」
久須那「――マリス。……その魔法はよすんだ……」
マリス「貴様の指図は受けな。さあ、全てを滅する。さもなくば、我が前にひれ伏せ、ひざまずけ！」
シルト「ダメぇ！」

SE：シルト、シールドを立ち上げる。

マリス「……貴様はわたしに刃向かうつもりか。――貴様は何だッ！」
シルト「デュレに手をあげるヒトは誰だって許さないんだから……。……こ、怖いけど……」
シリア「――シルト……。……お前がマリスに立ち向かえ」
シルト「ワ、ワタシ、――一人じゃ、イヤ。デュレ……？」
シリア「――デュレ、シルトと二人で行け。お前らなら何とか出来る」
デュレ「でも、わたしとシルトが抜けたら、魔法陣は……」
シリア「オレと久須那が空いた場所に入る。――出来なくてもお前たちがやるしかない」
デュレ「……。判りました。シルト、行きましょう……」
セレス「デュレ……。待って」
デュレ「え？」
セレス「お守り……。あたしにはこんな事しかできないけど……」

SE：セレス、短剣をデュレに。

デュレ「……短剣……、ありがとう。……シルト、行きましょう」
シルト「うん」
デュレ「手を握って……」

SE：キィィイイン。

マリス「……小癪な……。だが、これならばどうだっ！」
シリア「ダ、ダメだ。誰かがディフェンスをしてやらないと」
サム「俺がやってやるぜ、リボンちゃん♪　フィジカルディフェンス！」

SE：シールド。

サム「てめぇら、油断すんじゃねぇぜ！　んじゃ、ちょっくら行ってくるぜ」
シリア「お前まで行ってしまうと帰還魔法が行使できなくなる……」
サム「そんなことか。あの不死鳥がいれば魔力的には十分足りると思うぜ。あのがきんちょ、魔力をもてあまして危ねぇんだ。帰還魔法発動くらいしてやりゃ、当分落ち着くだろうさ。な？　それに俺の代わりにてめぇが入ればいいだけのことだ。――あいつはてめぇの敵だろ？　てめぇで始末しな」
シリア「しかし、お前……」
サム「ああ！　てめぇの心配はそう言うことか。なぁに、死にゃあしないよ。無茶をする気もねぇしな。さあて、いっちょ、こらしめてくるか！　デュレ！　そこの白いの！　攻撃に全力を

　　注げ。防御は俺が引き受けてやる」
デュレ「判りました……。シルト、あなたの得意な魔法は……？」
シルト「……。判んない。でも、何でも出来るよ。デュレがしたい魔法なら何でも」
デュレ「スクリーミングハリケーンは出来ますか……？」
迷夢「え〜〜？　また、それ？　巻き添えはイヤよぉ？　その娘の魔力ってリボンちゃんよりありそうだから、歯止めが利かなくなったら大変よぉ？」
デュレ「判ってます。でも、わたしにはそれしかないんです。それに……」
迷夢「それにぃ？」
デュレ「それに、マリスがスクリーミングハリケーンを抑えようとしたら、それだけ魔力を消費します。それなら、きっと、帰還魔法にも余裕が出来るはずです」
迷夢「む〜。……気は進まないんだけどなぁ。やるしかないかぁ」
サム「おいっ！　てめぇら、いつまでグチャグチャ話てんだ！」
迷夢「……。判った、やって。その代わり……失敗したら呪うわよ？」
デュレ「はい！（深呼吸）永劫なる闇の彼方、かつて栄光ある神々に列せられし邪なる僕、今、我の示したる場所へ召喚せり」

　SE：スクリーミングハリケーン

デュレ「古の盟約により封じられし邪なる魂・テュリオムの調べをここに。調べに乗りし追憶の想いに共鳴せし、一対の眼を用いて、付随する異空への道筋を指し示せ――」

デュレ「――スクリーミングハリケーン！」
デュレ（お願い、動いて……）
迷夢「マリスちゃ〜ん、逃げるんじゃないのよ？」
マリス「……今更、逃げる訳がない。貴様らを全員消し去るのがわたしの望みだ。それが叶うまでわたしはどこにも行かんっ！　――我が魔力よ、この右手に集中せよ」

　SE：魔力の集まる感じ。

マリス「光と炎の全てを賭けて、闇を滅する刃となせ。己の欲望、破壊の衝動に身を委ね、本能のおもむくままに大地を駆け抜け、我が左手に居場所を求めよ……。――フォトンスフィア！」

　SE：ドカン！

マリス「……そいつも食あたりをするらしいな……？　――危険すぎると封ぜられた禁呪でさえ、その程度の出力しか出せんとは貴様も……その精霊も……雑魚だ――」
シリア（……マリスの注意がデュレたちに向いてる……）
シリア「迷夢、行け！　今しか、ない！」
迷夢「了解！　親愛なる光の瞳、あたしの言うことをききなさい」
光の瞳「……気は進まぬが……」

　SE：魔方陣発動、再び？

迷夢「――さっきよりもちょっとだけ調子がいいかな？」
迷夢「……星霜の彼方より語られし、あまたの世の架け橋を閉ざしたる者に告げる。あたしは理を忘れし天使・マリスの送還を望むものなり。描かれし眼の向こうに在りしもの、……サライよ。二つの世に通ずる架け橋を開放し、翼をもちし天のお使いと称されし天使を送り返せ。架け橋の開放を望むは天使・迷夢。魔法陣に充満する魔力の全てを注ぎ込んで。――可哀想なマリスを元の世界に送り返してあげて……。マリスを呪縛から救うにはそれしかないから――」
マリス「妄想に取り憑かれて……呪縛されいるのは貴様らだ！」
デュレ「マリス！　あなたの相手はこっちです！」
マリス「……」
デュレ「シルトっ！」
デュレ・シルト「シャドウカッター！」
マリス「……小賢しい！」
迷夢「――さあ！　天使の世界に帰れッ！」
マリス「どうやって、天使の世界に帰るんだ？　たったこれっぽっちの魔力でわたしをどうにかできるとでも本気で思っているのか！」
迷夢「……これでもダメだなんて……！　リボンちゃん！　何か、いいアイディアはないの？」
シリア「策士のお前にないなら、オレにある訳がないだろ！」
迷夢「そっか、じゃ、ど〜しよ〜かな〜」
シリア「何を呑気なことを言ってるんだ？　これが崩壊したら、次をやってる余裕はないぞ」
迷夢「判ってるよ。まぁ……さっきみたいなことにはならないから、安心しとき？」
シリア「どこにそんな……」
迷夢「――ロミィ……、ちょっと頼むわよ。あたしだけじゃどうにも出来ない」
ロミィ「……」
迷夢「――ロミィの魔力を上乗せして……」
マリス「わたしは決して帰らない。ここがわたしの世界だ！　あああぁ！」
シリア「――案外、しぶとい……」
迷夢「耐えて、もう少しだから。もう少しだけ耐えたら、ケリがつくから」
久須那「もう、終わりにしよう、マリス。――お前は……帰るべきだ……」
マリス「わたしは帰らない。わたしは居場所をここに作るのだ！　うぁあああぁ――っ。帰されてたまるか！　まだ、終わっていない」

　SE：帰還魔法、強制発動！

マリス「いやだ！　あの世界には帰りたくない！　――迷夢ぅ」
迷夢「――さようなら……マリス。……もう、二度とあたしたちの前に現れないで――」

　・しばらくの沈黙。

セレス「これで本当に終わったんだよね……？」
デュレ「……終わったと思いたいですね……」
迷夢「……あのマリスちゃんの最後にしてはあっけなかったねぇ。最後の最後までもっとだだをこねると思っていたんだけど。流石のマリスちゃんもあの娘の魔力には敵わなかったのね。あ、そうそう、今から、キミはロミィだっ！」

ロミィ「……」
デュレ「それで……そのロミィはどうするんですか？」
迷夢「あ〜ん？　さっき、決めたじゃない。この娘……ロミィはセレスに預けるって。もうすっかり懐いちゃってるみたいだから、引き離すのも可哀想でしょう？」
デュレ「ですけど、セレスに預けて、ちゃらんぽらんに育ったらどうするつもりですか！」
迷夢「あら？　そんなつまんないことを気にしてるの？　大丈夫だって。その娘がいたら、逆にセレスのちゃらんぽらんさが矯正されるわよ。不死鳥のパワーをなめちゃダメよ」
セレス「あの〜、あたし不在のままそっちで勝手に盛り上がらないで欲しいんだけど……？」
迷夢「細かいことよ、気にしない、気にしない」
セレス「いや、『気にしない』って、あたしのことじゃん？　本人を目の前にしておいて、気にするなはないじゃないの。あたし、めちゃめちゃ気になる。ロミィがいたらあたしが何だって？」
デュレ「セレスの難儀な性格が“多少”は矯正されるんじゃないだろうかって」
セレス「あ、あたしのどこが難儀だって言うのよ。ステキでしょ？　フツーでしょ？」
デュレ「どうしようもないくらいに難儀でしょ。ちょっと突っついたくらいでいちいち、逆上するんですもの。それに——常識なしの単細胞だし……」
セレス「にゃにお〜。も〜、我慢できない。キミなんか……知ら……」
デュレ「——でも、いいところもあるんです……。短気ですぐカッと熱くなるけど、セレスはいつも同じ方向を向いています。——どんなことがあっても負けない強い心と強い意志……。それがあるから、わたしはあなたのことが大好きです」
セレス「い……？　あ〜え〜、——頭を強打したんじゃなくて？　デュレ？」
デュレ「言うに事欠いて何ですか！　セレスのことなんてもう知りませんっ！　迷夢さん、あっちに行きましょう。こんな分からず屋なんて、放っておけばいいんです」
迷夢「あ〜、あ」
セレス「いや、ちょっと、待って、置いてかないで〜」

SE：足音。と、追いかける足音。

シリア「——こんな事があったばかりだというのに、あいつらはタフだな。——それとも淡泊なのか、物忘れが早いだけなのか……。だが、どちらにしても頼もしい奴らだ——。あいつらがいなかったらどうなっていたか……」
久須那「決着はまた先に伸びていただろう。——或いは……違う結末を……」
シリア「——考えたくないことだ……。でも、……終わったんだな……」
久須那「——終わったよ。もう、夜の闇を恐れる必要もなくなったな……。うぐっ」

SE：久須那、膝をつく。

シリア「久須那！　大丈夫かっ。……まだ、耐えられそうか……？」
久須那「——判らない。今日かもしれないし、明日かもしれない。呪詛なんてものをかけられたのも今度が初めてだからな。——これも……運命の織りなす物語の一ページ。呪詛を解けるヒトがいない限り、わたしも……これまでだな」
サム「——弱音を吐くんじゃねぇ」
久須那「——バカ……。わたしは弱音など言っていない。事実を言っただけだ……。わたしだって、——まだ、死にたくはないんだ。やっと、お前と話せたんだぞ。……まだ、話したいこ

とはたくさんあるんだ。こんな……呪詛になんか取り殺されてたまるか」
サム「——判ってる。どんなことがあっても、絶対に俺がてめぇを死なせたりしねぇ」
久須那「安請け合いなんかするな……。お前はいつもそうだ。出来もしないくせにそうやって、そうやって請け合って、期待をさせて……、哀しませるんだ」
サム「……出来なくて哀しむのは俺さ……」
久須那「サム——、わたしはお前にそんな思いをさせたくないんだ。お前には判らないかもしれないが、……あんな、打ちひしがれた思いなんてさせたくない。だから、わたしは死にたくない。——死ねないんだ。わたしはまだ、お前と別れたくない」
サム「——俺もだよ。てめぇは俺が夢にまで見るくれぇなんだぜ？　てめぇは“特別”なんだ。ずっと焦がれたんだ。離さねぇ、てめぇはぜってぇに離さねぇ。死を司る神がてめぇを欲しいというのなら、俺がそいつをぶちのめしてやる」
久須那「はうぅ……っ」
サム「久須那っ！」
久須那「はぁ、はぁ。マリスは……天使の世界に帰ったんだ。もう、戦う必要なんてない……。だから、こんなところで……。はぁ、はぁ……。お前と二人で生きていたい……」

セレス「——向こうで、サムと久須那が……」
デュレ「久須那さんにかけられた呪詛が進行してるみたいです。出来るだけ早急に解呪を試みないと……」

SE：足音。

セレス「……その解呪を出来る人はいるの？」
デュレ「……リテールにはいないそうです。呪詛なんてもともとずっと東方のものなんですよ？　リテールの魔術師で呪詛を……しかも、解き方を知っている人なんか……一握りもいないんです。わたしが封印を解かなければ、こんな……」

■どこか、空の上から……。
ラール「そう、デュレが封印を解かなければ、こんなことにはならなかったね。けど、それが予定調和なんだから、諦めてもらうほかないよねぇ？　ルーン？」
ルーン「諦められなくても時は巡る。物語はきちんと終わる。そういうもんよ」
ラール「そういうもんかなぁ？　一つや二つ、終わらない物語があってもいいんじゃない？」
ルーン「終わったくれなきゃ、困るでしょ。こればっかりにつきあっていられないんだから」
ラール「まーそうだね。でも、名残惜しくてねぇ」
ルーン「はぁ？　そんなに名残惜しいんなら、一人でいつまでも見ていたらいいわ。つきあってらんない」

SE：ルーン、消える。

ラール「あ、待ってよ。ボクを一人にしない！」

□退魔師現る。
申、ジーゼとともにシメオンの遺跡へ……。
SE：足音。

申（……久須那さん……、どうか、無事でいてください……）

申「……ここが噂に名高いシメオン遺跡ですか……？」
ジーゼ「この遺跡は東方でも知られているのですか……？」
申「ええ。十三世紀末に天変地異が起こり、瓦礫の山になってしまったと。ここで何が起きたのですか……？」
ジーゼ「……いずれ、語るべき時が来たら、語りますよ……。それまでは……ね……？」
申「――ジーゼ……？」

SE：歩く、歩く。

ジーゼ「久須那！　久須那なんですねっ？」

SE：ジーゼ、走り出す。

サム「――久しぶりだな、ジーゼ。何とな～く、大人びた雰囲気になったかな？」
ジーゼ「……サムッ！　あなたも還ってきてくれたんですね……」
サム「ああ、本当なら向こうのてめぇにも会っておくべきだったのかもしれねぇが……。何か、行きにくくてよ。てめぇには世話になったし、あれなんだが……」
ジーゼ「そんなことない。でも、どうして。あなたがこの時代に生きている気配はなかったのに……」
サム「十三世紀末から時を越えて、ここに来た。……クロニアスがお目こぼししてくれた……んだと思う。まだ、来たばかりだからな。それで判らなかっただけだろう？」
ジーゼ「でも、来たばっかりだとしても、必ず見付けられるはずなのに……」
サム「詮索するのはあとにしねぇか？　今は……久須那が先だ……」
ジーゼ「……申、こっちへ……」
申「はい……」
サム「――申、久須那を頼む。……久須那を助けられるのはてめぇしかいねぇんだ」

SE：ごそごそ。

申「……この呪詛はかなり高度なものです。ぼくに解けるかどうか……。……でも、サラフィのお師匠さまなら、間違いなく解けると思います」
デュレ「サラフィまで行っている時間はありません。寸刻を争うんですっ！」
申「でも……、ぼくには自信がありません……」
ジーゼ「申なら大丈夫……。きっと、できます」
申「ジーゼさん……」

SE：ごそごそ。お札をぺたり。

申「し、失礼しますっ」

申「いいですか、どんなことがあっても出来るだけ、心を平穏に保ってください……。焦りや不安を感じていては上手くいきません。それこそ、呪詛の進行を早めることになってしまいます。信じてください……。必ず成功すると……」
久須那「――申、お前こそ、……緊張しすぎだろう？　もっと、リラックスを……」
申（お師匠さま――。ぼくに力を貸してください――。大丈夫、必ず出来る。今この時のために厳しい修行を積んだと思えば……）

申「気を楽に持ってください」

SE：何か色々。呪詛が解けそうな感じの音。

申「――もう大丈夫です。――呪詛は無事に解くことが出来ました」
久須那「申……、お前が来てくれて本当によかったよ……」
サム「――ああ、俺はまさか、てめぇと会うことになるとは思いも寄らなかったぜ。……久須那からはよく聞いていたからな。てめぇがいたから森は残った。――しかしよぉ、てめぇ、東方はサラフィから……遙々、遙か西方、リテールの地まで来るたぁいい根性してるぜ」
申「……ぼくもそう思います……」
サム「ははっ、てめぇもなかなか言うじゃねぇか！」
デュレ「……これで、網、安心ですね。……それにしてもぉ――、ロミィはすっかりセレスの頭の上が定位置なんですね？」
ロミィ「……」
セレス「……そうなのよぉ。何度言ってもきかなくて。――どうしてそんなにまで、頭の上にとまりたいのかしら？」
デュレ「セレスのことが好きなんですよ。そうでなければ、お母さんだと思っているんです」
セレス「お母さん？　何で？　と言うかさ。もし、お母さんだったとしてもよ、何故に頭よ？」
迷夢「あはは！　キミの頭が巣みたいで居心地がいいんでない？」
セレス「……キミってやっぱり、ヤなやつよね」
迷夢「それって、褒め言葉よね？　もちろん」
セレス「いやぁ……違うと思うんだけどぉ……？」
迷夢「あら？　キミはエルフの子猫ちゃんその二の分際であたしをけなすつもりなのかしら？」

SE：むぎゅ！

セレス「ちょ、ちょ～、い、息が……、デュ、デュレ？　助けて……」
デュレ「自分でどーにかしてください」
セレス「そ、そんなぁ……」
ウィズ「迷夢、その辺にしておいてやれよ。セレスが可哀想だろ。そんなにいじめたら」
迷夢「ウィズ！　あはっ！　ウィズ、いてくれたんだ」

SE：迷夢、セレスを放して、ウィズに駆け寄る。

ウィズ「いるも何も、迷夢がいろって……。イヤだと言ったら、張り倒しそうな勢いだったから」
迷夢「そうだっけ？　いやさぁ、そうでも言わないと、逃げ帰っちゃいそうだったし。折角、知り合いになれたんだから、お互いを深ぁ～く知る前にさよならだなんて、野暮ったいでしょ？」

ウィズ「――何がどう野暮ったいんだか……」
セレス「……ウィズ。キミって迷夢に随分と気に入られているみたいだけど、何かあったの？」
迷夢「あたしのウィズにくっつかないでもらえるかしら？」

　　SE：ゴチン。

セレス「いったぁ～い！　何、すんのよ！」
迷夢「あははっ、ごめんごめん。つい、いつもの癖で」
セレス「いつもの癖ってどんな癖よ！」
迷夢「あらぁ？　あたしにそんな口を利いても大丈夫なのぉ？」
セレス「だ、大丈夫で……あ、ある訳がないでしょう？」

シリア「――オレは……行くよ」

　　SE：シリア、歩く。
　　SE：そよかぜ、吹く吹く。

久須那「――もう、行くのか……？　みんなに挨拶をしなくても……？」
シリア「湿っぽいのは嫌いなんだよ。――それにオレがいなくなってもサスケは残る。あいつは封印の絵に住み着いてるようなもんだからな。大丈夫、あいつはオレだ。オレがいなくなっても、オレはお前たちと一緒にいつまでもいられる……。お前の呪詛も無事に解けたことだし、この時代に思い残すようなことは――何もない」
久須那「そうか……」
サスケ「――ホントにそうなのか、親父どの……？　……確かにな、あの絵には未だレイヴンの魔力が残っているから、オレは今後かなりの間、ここにはいられるだろう。でも、それで親父どのは、本当にここにいることになるのか？」
シリア「……ならないな……」
サスケ「……親父どのは気が付いているんだろう？　このまま……別れてもいいのか？」
シリア「ああ……。出会いは仕組んだものだったからな。別れは気ままにいくさ」
サスケ「哀しむぞ。特にセレスは。あいつはお前を慕っているから。何も言わずに姿を消したらショックで落ち込むだろう。――バッシュと親父どのを一度に失う……」
シリア「……それも、人生だろうさ。それにあいつにはロミィがいる。哀しんでいる暇はない。――いいだろ？　オレは思い出の向こう側に消えるんだ。後は任せたぜ、サスケ」
サスケ「……親父どの！」
シリア「――気持ちは変わらない。オレが強情なのはお前がよく知ってるだろう？　……それにオレもメッセージを受け取っているからな。クロニアスに面倒をかけるようなことはあまりしたくない。フフ……、あいつらに別れを告げに行ったら、オレはどこにも行けなくなる――」
サスケ「……判ったよ。……勝手に……どこへでも行ったらいい。でも、死なないで欲しい……」
シリア「それは無理な相談だな……。お前も知っているだろう……？」
久須那「シリア……。クロニアスは時の道筋が一つではないことを教えてくれたんじゃないか？」
シリア「――ひょっとしたらな。だが、それはここじゃないどこか別の世界のことだ」

　　SE：シリアが去る足音。

シリア「――オレは……バッシュともう一度、あの街並みを歩くんだ……」